

一人ひとりの個性が響きあう学級集団作りを目指して

5歳児 ほし組 担任 安藤 佐智子

はじめに

今年は、「みんなでお祭りをしよう」という共通の思いのもと、11月5日に「附属幼稚園の秋祭り」を行った。このお祭りの活動は、研究の仮説にもあるように、

- ①自分の願いやめあてをもって遊びを追求していく姿
- ②いろいろな友だちの思いやよさを受けとめ響きあって生活していく姿

につながる多様な経験を子どもたちに実現していくであろうという保育者の見通しのもと、本年度計画した活動である。その取り組みの中で子どもたちは、豊かな発想力やアイデアを発揮し、友だちや保育者とともいきいきと遊びを創っていく姿が見られた。しかし、このような姿は進級当初から見られたものではなかった。

ほし組は、年中組2クラスを再編成した学級である。進級当初は、「年長になった」という張り切った気持ちをもって生活している姿が色々なところで見られた。しかし、旧クラスの仲良しの友だちとのかかわりを強く求める姿や、遊びに対する「やってみよう」という意欲や、願いを持って取り組んでいこうとする姿が見えにくいといった様子からも、不安や緊張感を抱えていることがわかった。自分が「ほし組」に所属することになったことはそれぞれに受けとめているが、幼稚園の中での『自分の家』つまり安心して自分が存在できる『場所』として、クラスは成り立っていない状態であった。そのため私は、4月からの一年間の生活を通して、

- 一人ひとりが自分の持ち味がのびのびと発揮できるように、
- 一人ひとりの個性が学級集団の中で響きあえるようになってほしいと願って学級経営にあったってきた。

本稿では、**けんた**という子どもに焦点を当て、学級集団の中で様々な活動や他の子どもとのかかわりのどのような過程を経て、自分の持ち味を発揮していけるようになったのかを明らかにしていきたい。また、その中で、個と学級集団の相互作用と時期時代の保育者の環境の構成のあり方についても考えてみたいと思う。

仮説

子どもたち一人ひとりの願いや思いを保育者がしっかりと受けとめながら、学級の友だちとの気持ちのつながりを育てていくための援助をしていけば、子どもたちは学級の中で自分の持ち味を発揮していくであろう。

1、事例と考察

A、11期から14期のけんたの育ち

けんたのプロフィール

生年月日 平成7年1月18日生まれ

家族構成 父 母 弟 本人 4人家族

○製作遊びが好きである。友だちとかかわって遊ぶことは少なく、大人とのかかわりを求める。事務室や保健室などで過ごすことが進級当初多かった。

○今年度、14期におまつりを実施することのきっかけとなったのが、4歳児のときに「幼稚園みんなでお祭りがしたい」といった本児の願いである。

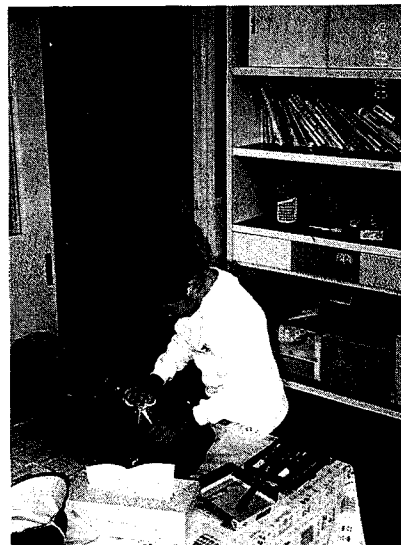
○11期（4月～5月中旬）

<エピソード1>ピストルや剣を手にもって・・・（4月中旬）

進級当初、家から材料を持ってきては、ひとりで黙々と剣やピストルを作る日が続いた。ゴムをつけて弓矢が飛ぶようにするなど細かいところまで工夫して作っていく。担任に対しは「先生、紙ない？」など必要なものを要求し、出来上がったものを「見て」と保育者の所へやってくる。「けんちゃんすごいのができたね」と言うと「ぼくは作るのはじょうずだよ。名人だけん。」と嬉しそうに言う。しかしクラスの中にいる時の表情は硬く、友だちが **けんた** の遊びに興味を示し傍にやってくる、「おしえて」と言ったり、一緒につくろうとしたりするとまるで邪魔をされるかのように、嫌そうな表情を浮かべている。保育者は、友だちが **けんた** のしていることに関心を向け集まってきているので、何とか **けんた** の気持ちを友だちのほうへ向けさせようとするのだがそのような保育者に対しても距離をおこうとする。

また、出来上がるとつくったものをしっかりと手にもっているいろいろな場を歩きまわっている。保健室や事務室などにもいき、大人とのかかわりをもとうとする。

けんた は4歳の時にみんなでお祭りをしたいと言っていたが、そのような気持ちを持っているようには感じられなかった。自分から人とかかわることはほとんどなく、自分の世界で得意な遊びをすることで安定している。ピストルや剣を持ち歩く姿から、周囲に緊張感や不安感を抱いていることを感じる。また、近づいてくる友だちに対して、自分の邪魔をするといった素振りを見ても、友だち気持ちを向ける余裕がないようであった。保育者が **けんた** の遊びに興味を示した子ども達とけんたを触れあわせていこう



とするとそのような保育者に対しても距離を置こうとする姿とであった。

そのことから、今保育者が大切にしなければならないのは、新しい環境の中で自分の居場所を模索している **けんた** を大きく包み込んで、待つことなのではないかと感じた。

○12期（5月中旬～7月中旬）

<エピソード2>何やってるの？(1)

みつひろ と **こうた** が秘密基地を作りたいといったことを発端に始まった木工遊び。かなづちでくぎを打ったり、のこぎりで木を切ったりすることをテラスで4、5人の子どもたちが取り組んでいる。

けんた 「何やってるの」

T 「大工さん してるんだよ。」

けんた 「ふーん なにつくっているのかなあ」保育者のほうを見て聞く。

みつひろ 「ひみつ基地の階段だよ」

T 「けんちゃんもやってみる？」

けんた 「うん。いいけど・・・」

けんた はかなづちを持とうとするがずっとその場からはなれていく。

(2)

けんた 「おれも、絵の具塗ろうと思ったのにみんながやったらいけんっていう。」木片に絵の具を塗ることを楽しんでいたそうたちに興味を示し、自分も筆を持ち仲間に加わろうとするが拒絶されたようである。

T 「そうくん、けんちゃんも面白そうだからなかまにいられてって・・・」

そう 「いいけど、ひろしがいいっていったらね・・・」

T 「ひろしくん どう？」

ひろし 「いいよ。じゃあ ここぬって・・・」

けんた は筆をもって塗り始めるが、**そう** たちの強いつながり中に入っていけないようである。

そう 「つぎ ここ赤でぬるぞ。」

ひろし 「おれこっち 」

そう 「おまえ（けんた）こっち塗ってくれん？」

けんた 「ここ？」

しばらくすると、**けんた** は別の木をみつけ色を塗り始め、くぎも打ち始める。飛行機を作ることを思いついたようである。

そう 「おーい。けんた。こっちせんの？」

けんた 夢中でイメージしたものつくろうとしており、返事を返すことも忘れている。

そう 「おれも、ぬってやろうか？」
 けんた 「やめろ・・・」
 T 「ね。そうくんが一緒にやってあげようかっていってるよ。」
 そう 「羽とかつければいいんじゃない」
 けんた 「かまうな。俺自分でするけん」 そうは無理やりにぬろうとする。
 けんた 「もう、邪魔するけん、やめる」と渋い顔になるけんた。
 T 「そうくんも、けんちゃんの無理やりやったらいけんわ。ちょっとまって。けんちゃんもそうくんが言い考え出したから聞いてあげたらいいんじゃない？」

しかし、保育者の言葉も納得できず、二人は渋い顔。

☆幾分、あたらしい環境に慣れ、気持ちのゆとりがでてきたことを感じる。「何してるの」と特に保育者がかかわっているあそびの場に興味を示し、その様子を見ている **けんた**。11期に比べて、**けんた** は周りの子どもたちの遊びが視野にはいってくるようになったことがわかる。

(2)の事例では、自分も興味を持った遊びに取り組んでみようとする気持ちが出てきている事がわかる。**けんた** が **そう** たちが「よせてくれない」といったことに対して保育者に訴えにくるなど、今までだったら拒否されたらすぐに身を引いてしまう行動に出ていた **けんた** が、友だちのしている遊びに対して自分もやってみたいと強い意志を表したことが11期の姿と違う面である。保育者はそのような **けんた** の姿から、遊びを通して友だちとかかわるきっかけが作っていけると思い、気持ちをつなげていこうとするが、絡まっていけない。子どもたちは同じイメージに向けて取り組み、その中で呼応しながらイメージが膨らんだり、深まったりするのではなく、**けんた** が飛行機を作り始めたように、この時期の子どもたちは友だちの遊びを発端にして個々の遊びへ取り込んでいき、自分の遊び方を見つけ出していくといった傾向が強かったように思う。**けんた** のこの時期の友だちとのかかわりは気持ちのつながりということではなく、自分だけの世界から一步を踏み出し、周りの友だちの存在に気付く段階や時期であるように感じた。

○13期（7月中旬～10月中旬）

<エピソード4> ほし組のレストラン

前日からのレストランの続きをはじめ **ほなみ** **はるこ** **なな**

「今日も新しいメニューあるからきてね」とはりきって、メニュー作りを3人ではじめる。

しばらくすると、チケット配りに保育者の所へやってくる。保育者は「あとでいくからね」と投げかけいったんその場を去る。

T 「こんにちは もうお店 開店してますか？」

ほなみ 「はい どうぞ なにがいいですか？」

T 「この焼きそばセット お願いします。」

そこへ **けんた** がやってきて ちょこんとTのひざのうえにのる。

けんた 「おれ ステーキ。ステーキがくいたい。」とつぶやくように話し掛ける。

T 「ステーキありますか？けんたくんが食べたいんだって」

はるこ 「ありますよ。セットで飲み物は？」

けんた 「ジュース」

なな 「ちょっとお待ちください。」

T 「あーおいしかった。セットでお腹がいっぱいになったよ。」

けんた 「うまかった・・・」

T 「こんなにおいしいお店があることお友だちやさくら組さんたちにも宣伝しとくからね」

けんた 「そうだ。おれ 旗つくろうっと。先生紙と棒・・・」

○保育者は **けんた** の要求したものを一緒に準備する。何をするのかと傍で見守っていると画用紙に「ほし組のレストランにきてください」とかく。

けんた 「おれ 宣伝するから」とテラスで旗を振り始める。

「あっつ。そうだ。音楽、音楽も必要だ。先生・・・あれあれ『ぼくらは未来の・・・』のやつ」

○運動会で使った曲をテラスから園庭に向けてかける。

しばらくすると楽しそうな曲にひきつけられて子ども達が集まってくる。

けんた 「あそこにレストランがあるからいってみて」といろいろな友だちに声をかける。

「そうだ、看板もつくろう」

T 「いいかんがえだねえ」

けんた 「レストランもパワーアップせんといけんわ。こっちはっかパワーアップしてもだめだわ」

T 「おーそうだそうだ。けんちゃんのパワーがきつとななちゃんたちのところへもいってるよ。先生、けんちゃんがレストランもパワーアップしてっていったよって伝えてくるね」

なな 「なんだか いそがしくなってきた。」

はるこ 「そうだ、レストランのテーブルにひくものつくろうよ」

○だんだんとお客さんで保育室がいっぱいになる。

けんた 「こうなったら 1000人。幼稚園全部いれよう」

○張り切ってもう一つ旗を作りそれを園庭にたてはじめる。

みつひろ 「なにやってるの？」 自転車に乗っていたみつひろとひろしが興味をもつてよってくる。

けんた 「レストランの宣伝」

みつひろ 「うまいね 宣伝。おいしいレストランつくれるといいね。」

ふたりは **けんた** が旗を立てるのを一緒に手伝っている。

けんた 「こんなに宣伝してにわとりもきたらどうしよう。(ぼくは) アイディアマンだわー」

けんた は自分のことを自分で誉める・認めるかのようにこう言った。

☆この9月29日の事例を通して、12期から13期にかけて目に見えるかかわりの広がりだけでなく、学級の中で目に見えない気持ちのつながり（仲間意識）の育ちもとらえることができる。11期の **けんた** には、ピストルや剣など自分のイメージの実現に向けて一人で工夫をしながら作っていく姿があった。これまでの **けんた** は豊かなイメージや発想力を生活の中で表していた。それまでの **けんた** の遊びへの追求は友だちとのかかわりの中で広がりをもつものではなかった。しかし、この日の **けんた** の発想力やイメージの追求を支えたものは、「友だちのお店をお客さんでいっぱいにしよう」という思いであった。そのことがこれまでと大きく違う点であるといえる。レストランに「よせて」加わったわけではないが、**けんた** は **はるこ** たちの気持ちや遊びをうけとめながら、**はるこ** たちは **けんた** の気持ちに応えるべくよりよいレストランを作ろうとする姿など、気持ちのつながりがベースとなり、呼応しながら、そしてお互いに刺激しあいながら取り組んでいると捉えることができた。

また、**けんた** が「(ぼくは) アイディアマンだわー」と誇らしげに言った姿は注目される。**けんた** は年中のときから自分が工作名人であることに自信を持っている。しかしこのときの言葉は、仲間の中で認められたことによる。自分への自信もあるが、仲間の中で確かに自分の存在感を感じられたからこそ生まれた言葉なのではないかと思う。

○14期（10月中旬～2月上旬）

＜エピソード5＞ お化け屋敷をしよう

前日から作り始めていた **けんた** **そう** **しん** のお化け屋敷。

けんた 「先生、今日は2階に温泉もあるよ。な、そう」

T 「いいねえ。昨日より怖いお化け屋敷になってるかなあ」

けんた 「怖くて、震えたら温泉に入ればいいんだよ。」
そう 「おい けんた お客さん呼ぶチケット準備出来てる？」
けんた 「オッケー。たくさんつくってるよ。もうすこし」
しん 「おれ脅かすのするわ。」
そう 「太鼓で宣伝にいくぞ」

けんた がつくったチケットをもってそうが宣伝に行くと、年中児たちがやってくる。

けんた 「しん お客がいっぱいだぞ。こわくしろよ」と驚かす役のしんに健太が声をかける。

このお化け屋敷の横では女の子たちのお化け屋敷も始まった。

けんた 「女のところこわくないわ。」

そう 「俺らのほうが怖いにきまってる。」

その声を聴いて男児のお化け屋敷に女兒もやってくる。また、自分たちの場に帰ると、

みか 「ねえ。(積木) この中にお化けの絵を書いてはろうよ」

なな 「隙間から、なわとびいれておどかしたら」とみんなで考えを出し合っている。

(2日後)

けんた **だい** **そう** **こうた** **たかお** ら

けんた 「お客さんがいっぱいきて、狭くなるけんやだ」

T 「じゃあ広くしたら？」

けんた 「積木がないもん。もうやめだわ・・・」

T 「そんなこと言わずに・・・」

ほなみ 「うちのところと合体したら？」

けんた 「だめだと思うわ。・・・」

こうた 「できるよ。ここのところ少し動かせばいいじゃん」

あい 「これも使っているよ」

はじめはもうつくるのをあきらめかけていた **けんた** もみんなが気持ちを受けとめアイデアを出してくれたことによって気持ちをたてなおしていく。

こうた 「すごい おおきのにしようよ。」

けんた 「遊戯室全部がいい」

だい 「どんなのにする？」

こうた 「設計図かく？」

4人で顔お付き合わせてどんな風にしたら暗くて怖いお化け屋敷になるのかを相談する。

☆前日から作り始めていたお化け屋敷。「2階は温泉」と新たにイメージを広げて遊びに取

り組んでいるけんたの姿があった。[そう]達と、[けんた]はチケットを作る係、[しん]はおどかす係、など役割をそれぞれが持ち、怖いお化け屋敷を作ろうという共通する思いに向けて取り組む姿があった。

12期における事例の中でも [そう]達とのかかわりがあったがこのときは、[けんた]はその仲間の中に自分の居場所が見つけられない状態であった。[そう]たちにとってもしっかりとした気持ちのつながりがない状態、つまり、お互いに相手の考えや良さを受けとめる仲間関係までには育っていなかった。しかし、[けんた]もまわりの子どもたちも14期までの生活の中で色々な友だちと触れ合う中で、いろいろな考えに触れたり、自分の考えを受けとめてもらう経験をしたり、自分と考えが違うことによって生まれるトラブルや葛藤を体験しながら友だちとかかわる力を育ててきたことが今の姿に結びついているように思う。また、いろいろな友だちのイメージや考えを受けとめて呼応していくようになったことにより、周りへと遊びが伝播していくようになり、より豊かなイメージや発想を生み出していく姿へとつながっていったように思う。

B、考 察（11期から14期のけんたと学級全体の子どもたちの姿より）

[けんた]の11期から14期の姿と学級全体の子どもたちの姿を重ね合わせてみると、個々の発達の期は多少前後するもののおおむね次のような育ちの過程と捉えることができた。

11期

○自分の好きな遊びや場、仲良しの友だちを寄り所としながら新しい環境を受けとめていく時期

進級当初、クラス編成によって学級の仲間も担任も変わったことにより、年長になった張り切った気持ちも表しているが、不安感や緊張感をさまざまな形で表している子ども達であった。〈エピソード1〉の [けんた]のように自分の得意な遊びをすることで安定し、自分の居場所を模索している姿や、仲良しの友だちとのつながりを心の基地に新しい環境を受けとめていこうとする姿〈エピソード6〉も見られた。この期は、それぞれに自分が「ほし組になった」ということは受けとめているがほし組の構成員、仲間の一員であるという受けとめはない。つまり、ほし組の友だちに目を向けていける気持ちのゆとりはなく、新しい環境を自分の中で受けとめていくことで精一杯であったように思う。この時期は友だちに目を向けさせる、また遊びを深めさせていく援助ではなく、自分の得意な遊び、その時々遊びを一緒にする中で担任がしっかりと認めること、仲良しの友だちのかかわりを保育者が適切に支えることによって、

- 自信と安心感を持たせていくこと、
- 担任に対する信頼感を培っていくこと

が大切であると思う。

そうした経験が、安心して自分らしさを発揮していくための基盤になるのではないかと考えられる。

＜エピソード6＞当てくじやさんするから先生きて…（4月下旬）

ゆきこ ゆいこ まいこ は昨年度さくら組からの仲よしである。登園してくるとテーブルをきまった位置に出して当てくじやさんの準備をはじめている。

ゆきこ 「先生、今日も当てくじやさんするからきてね。」

T 「うん。昨日、先生大当りしたから今日も当てるぞー」

ゆきこたちは、さくら組でしていた時と同じように割り箸にしるしをつけてくじをつくり、折り紙で次々と景品をつくっている。

ゆいこ 「わたし、チケットつくろう」

チケットに『ほし組の当てくじやさんにきてください』とかく。

まいこ 「先生、はいチケットあげる。」

T 「ありがとう。もうお店ひらいてるのかな？」

ゆいこ 「うん、いいよ。これ引いて」

T 「赤だ」

まいこ 「当たり。二つ、好きなの選んでいいよ」

保育者が景品を選ぶとまた3人でおしゃべりをしながら折り紙を折り始める。つくったチケットも、友だちに配るわけでもない。

12期

クラスのいろいろな友だちやその遊びに目を向けながら、自分のみつけた遊びの経験を広げていく時期

学級全体の雰囲気は5月中旬頃から変化してきた。進級当初の緊張感も取れ、保育者に対しても自分の欲求や願いを素直に表現する、ダイナミックに水遊びをする姿など伸びやかさが出てきた。この期は、＜エピソード2＞の **けんた** のように、友だちの遊びに興味を示し、「なにやってるの?」「よせて」と遊びの場に色々な子ども達が「あつまってくる」ようになった。しかし、イメージしたものや思いを出し合いながら作り上げていく姿へとはまだ結びついていかない。この時期の経験させていきたいこととしては、友だちの遊びに関心を持ち、集まっていくことによって

○クラスの色々な友だちの存在に気付くこと

○友だちの遊びに興味を持つことによって、自分もやってみようという意欲や態度を育み、個々の遊びへとつなげていくこと

ではないかと思う。そのためこの時期の環境の構成で大切なことは、

○子どもたち同士の気持ちをつなげていくことを急ぎすぎず

○一人ひとりが自分の願いやめあてを見つけ満足するまで取り組んでいけるよう個々にささえていくこと

なのではないかと思う。このことがクラスの中で自分に自信を持って生活していくことにつながるのではないかと考えられる。

13期

○個々の遊びを通していろいろな友だちに触れ合っていく中でクラスの仲間に対する気持ちのつながりを育てていく時期

9月に入り、子どもたち一人ひとりが、例えばうんていに挑戦する、固い団子を作ろうと工夫するなど個々に自分の願いを持ち繰り返し取り組んでいく姿が見られるようになってきた。興味がある遊びに旧クラスの友だちの枠を越えて色々な友だちと触れ合っている姿、そして12期までの様子とその場その場のかかわりであるが会話を楽しみながら個々の願いや思いに向けて、遊びに取り組んでいる姿も見られた。また「先生、今日始めて〇〇君とあそんだよ」ということを保育者に伝えにくるようになった姿からも発達の様子が13期に入ったととらえることができた。また、かかわる姿だけでなく〈エピソード4〉の「けんた」のように、「ほなみ」たちと直接会話をし、仲間に加わったわけでもないが、自分のレストランを宣伝するかのよう「ほし組のれすとらん」という看板を作った姿からも、13期までの生活の中でほし組の仲間に対する気持ちのつながりを少しずつ培ってきていることを理解できた。また、「みつひろ」たちのように「けんた」の考えを認め、自転車でレストランを宣伝する姿なども同様である。「かかわり」ということを一緒に遊んでいる姿や会話をしている姿など直接的なものだけで捉えるのではなく、「みつひろ」たちが「けんた」の姿をとおして、「ほなみ」たちのレストランを「応援しよう」としたことのよう、間接的ではあるが気持ちが響きあっている姿こそ大切であるということをおぼろげに感じ、とかく目に見えるかかわりの部分で保育者は支えに奔走しまいがちであるが、目に見えない部分の子どもたちの仲間に対する気持ちは、どのような育ちの過程にあるのかを視野にいれて環境を構成していくことが必要なのだと思う。

しかし、色々な友だちとのかかわりが広がるにつれ、次第にトラブルも多くなってきたことも事実である。今まで遊んだことのない友だちと触れ合うことによって、新しい考えや発想に触れることができると同じように、考えの違いや思いのぶつかり合いによる葛藤も増えてきた。この期はそれぞれの遊びの場でのふれあいを大切にしていけるとともに、

○お互いの気持ちを伝えたり、感じさせたりしていく支えをしていくことによって

○友だちの思いや良さに気付く

○友だちに自分の思いや考えを受けとめてもらう

喜びを感じることによって、より意欲的に遊びにむかっていくといった経験が大切なのではないかと感じた。

14期

○友だちと呼応ながら遊び中で自分の発想力やイメージや考えを膨らましていく

○クラスの色々な友達にかかわっていくなかでより親しみをもち仲間意識を高めていく
時期

14期に入ると、子どもたちが遊びの場を共有しているだけでなく、イメージを共有して色々な友だちと触れ合いながら遊んでいる姿を見ることが多くなった。こんな姿をとらえて、保育者は14期の生活の中で「マールゴールドを目指そう」を学級みんなで共有しながら生活に向かっていくことによって、

○色々な友だちとのかかわりを大切に、よりクラスの友だちに親しみをもち気持ちをつなげていくこと

○友だちのかかわりの中で呼応しながら、より意欲をもって遊びに向かっていく力を育てていくことを生活のねらいと考えた。

またこのような14期の生活の構想のなかで、上記のような経験をより豊かなものにしていくと、共有する活動「附属幼稚園の秋祭り」に取り組んだ。この活動は、昨年度4歳児だった「けんた」が、「幼稚園のみんなでお祭りがしたい」と願ったことを発端として、年度当初教育課程に位置付けたものである。学級全員で共有する活動として「みんなでお祭りをしよう」と投げかけることによって、「マールゴールド」の心情や意欲、態度につながる経験も豊かなものにして次のようなねらいをたて取り組んだ。

○「附属幼稚園のあきまつりをしよう」

1. この活動を通して育てていきたいこと

○その子らしい発想やイメージを持ち、それを実現していこうと自分なりに考えたり、工夫したり、試したりしていこうとする意欲。

- ・「附属幼稚園のあきまつりをしよう」という共通の願いを実現していくために、それぞれの子どもが自分なりのめあてをみつけ取り組んでいく過程を大切にしていきたいと考えた。また、その子らしいオリジナルな発想やイメージを発揮し、工夫したり試したりしながら自分の願いを実現させていこうとする姿を認めたり励ましたりしていき、自信や存在感をもって生活をしていけるようにしたいと考えた。

○他クラスの友だち、他クラスの先生とのふれあいを通じて、クラスの枠を超えて色々な人に柔軟にかかわっていく力。

- ・仲良しの友だちとの強いつながりの中で遊ぶことが多い、家に帰ってからも異年齢でまざって遊ぶ経験が少ない子どもたちにとって、この活動は、色々な人と触れ合うよいきっかけになるであろうと考えた。お店屋さんにやってくる年中、年少組の友だちに、親しみを感じより柔軟にかかわっていけるようになったり、頼りにされる誇らしさを感じたりするなどの経験をしていってほしいと願った。

○クラスの友だちと共に「秋祭り」に取り組む中で、自分とは違う考えや思いをもつ友だちに触発され自分の経験を広げたり、友だちの良さにきづいたりしていくなど、クラスの色々な友だちと心と心をつなげていってほしい。

- ・自分のお店の準備をする中で、自分とは違う考えや思いをもつ友だちの存在に気づき、自分の気持ちや考えを受け入れてもらう心地よさを感じたり、自分の考えを押し通すだけでなく相手の思いも感じたり受けとめたりしながら取り組んでいけるよう支えていきたい。また、「ほしさん みんなでがんばろう」という気持ちを揺さぶっていき、クラスみんなでやり遂げた満足感や充実感を味わわせていきたい。

このような願いの中で、**けんた**らのように「怖いお化け屋敷を作ろう」と自分たちのイメージを持って、自分の得意なことを生かしながら仲間の中で呼応しあって遊びを展開していく姿や、二つのお化け屋敷がひとつになっていくように、みんなで力を合わせて取り組んでいく姿も見られた。このように気持ちがつながって呼応できる関係が育つことによってより意欲的に遊びを追求する姿へとつながっていったように思う。



また、**けんた**たちだけでなく、それぞれのお店に保育者がお客さんにならなくても自分たちで行き来したり、楽しそうだと感じると仲間に加わったりと、日々柔軟に仲間関係が変化しながらお祭りの活動が続いていったように思う。この期の子どもたちの集団が進級当初とは違い、気持ちのつながりを持ちながら個と個が混ざり合い始めた時期だからこそ、共有

する活動として投げかけた内容は、この期の生活の中で個と個の気持ちをつなぐ手立てとなったと感じている。この期の「みんなで」という気持ちは、担任はクラスみんなで一緒にという思いが強かったが、子ども達にとっては、「お祭りをしよう」という願いの中で、

○自分の願いやイメージを発揮すること、

またお祭りの一つの特徴として、お客さんとのやりとりができるつまり自然に人とかかわる状況ができるということが、

○クラスの仲間に対する親しみを深めるきっかけであったように思う。

この活動のように時期時期の子どもたちに必要な経験を充たすであろう活動を学級全体に投げかけることによって、よりその期の生活を膨らまし、経験を豊かなものにしていける。しかし、この活動を投げかけた時に、例えば「ぼくたちは映画するけん」といっていても、今の自分の目標である自転車に日々挑戦している姿や、自分がお店を開くとかではなくお客さんとしてのかかわりをもとめていく姿など、その時々一人ひとりの願いや興味の持ち方は千差万別であることに改めて気付かされた。保育者は一人ひとりがどんなことを受けとめて今何を体験していこうとしているのかということ、個々の発達の過程とともに見極めながら援助していくことが必要であると感じた。



この実践を通して気付いたこと

11期からの子どもの姿をおっていく中で、ほし組という新しい環境の中に自分の居場所を模索する時期から、クラスの友だちに対する気持ちのつながりを感じながらほし組の中での自分の存在感をたしかなものにしていく姿を捉えることができた。では、子どもたちが仲間とのかかわりの中で自分の存在感を感じるようになるためにはどのような環境の構成が大切なのだろうか。

○担任との信頼関係を気付くこと（担任が子どもたちの寄り所となれるように）

進級当初の子どもたちは、年中組の生活の中でさまざまな経験をつみかさね、けんたのよ

うに自信を持って「ぼくは工作名人だよ」といえるほどのたしかな自己存在感をあげていることがわかる。しかし進級当初は、たしかに、豊かなイメージを持ち、器用にいろいろなものを作っていくが、「もっとやってやろう」という意欲があまり感じられず、どこか不安そうで安定感を感じられなかった。また、仲良しの友だちとあくじやに取り組んでいる子どもたちも、夢中になって取り組んでいる様子ではない。しかし、担任に対しては店にきてくれるように何度もさそいにきてくれていた。担任に認められること、一緒に遊んだりスキンシップをとったりすることによって安心したり、「おもしろいね。」といってもらうことで、自信を持ったりするなど、担任との気持ちのつながりを育んでいくことによって安定感を持つことが大切であると感じた。

○自分なりのめあてや願いをもって生活していけるように支えていく

12期に入ると色々な友だちの場へ「よせて」と関心を持ってかかわっていく姿が出てきた。この姿は担任としてとても嬉しいものであり、色々な子ども達同士の気持ちをつなげていきたいと思った。

お互いのイメージや思いをしっかりと感じあわせていくことも大切な援助であると思うが、**けんた**のように友だちの遊びに触発されて取り組む中で自分の願いやめあてを見つけ満足するまで取り組んでいけるよう支えることも大切な援助であると感じている。最近の子ども達の傾向として、自分で、自分のイメージや思い、願いをもって遊びに向かうのではなく、友だちと一緒にいることに安定感を求めて本当に自分がしたいことを見つけられないままであることもある。しかし、依存した関係は本当の仲間関係といえるのであろうか。本当の意味で仲間と呼応していけるためには、依存している関係ではだめであると思う。そのためには、保育者はかかわりを支えていくだけでなく、一人ひとりがしっかりと自分の考えや願いをもって、それに向かって取り組んでいけるよう支えることが大切である。一人ひとりが自分の願いやめあてをもち取り組んでいくことによって、自分に対する自信を持っていく。自信を持つことによって、生活の中で安定感が生まれ、友だちとかかわりにおいても自分をしっかりとってお互いに向き合っていけるようになり、より良い仲間関係を育てていけることとなるのではないだろうか。

○色々な友だちにかかわっていく経験をささえていく。

ほし組は年中2クラスを解体した学級のため、進級当初旧クラスの仲良しの友だちとのかかわりが強い、自分とあまりかかわりがいい友だちを受け入れにくいといったという姿が見られた。しかし11期からの次のようなステップを通して、かかわりが広がっていったように思う。

自分と新担任との信頼関係づくり→自分の気持ちの安定→周囲への視野の広がり→クラスの友だちの存在に気付く→かかわりを広げる（自分から周囲へ 周囲から自分へ）→お互いの思いや考えに立ちどまる→思いや考えを受けとめようとする→ともにイメージや思いを共有しながら遊びをつくっていく（呼応する関係）→友だちに対する信頼感

しかし、このようなステップを支えるものとして、時期時期に個と集団をつないでいくための保育者の環境の構成は必要であることはいうまでもない。保育自身がふとした子どもたち同士のふれあいを大切にしていくこと、また適「機」に色々な友だちと触れ合える経験につながるような時期時期の援助のあり方を考えていく必要があると感じた。

例えば、14期の生活の中で経験した「お祭りの活動」。13期までの子どもたちの様相から、いまの子ども達ならば、この共有する活動を投げかけた時に、より色々な友だちとのふれあいを自然な形で体験することができるのではないかと感じた。そこで、色々なともだちと触れ合う経験もねらいの一つにあげ、共有する活動として子どもたちに投げかけた。〈エピソード5〉でも触れたように子どもたちは、友だちのお店にお客さんとしてかかわっていったり、困っているところを助け合ったりしながら、日々いろいろなメンバーと触れ合いながらお祭りの遊びを楽しんでいた。このような姿が出た要因として、「お店屋さん」というものが子どもたちのお祭りのイメージとしてあったことである。お店屋さんというのは、売る人、買う人という必然的にかかわりの持てる遊びであったことがいえるであろう。しかし、子どもたち同士が自然にかかわりあえる状況であったということもであるが、たとえ状況があっても、周りの友だちに対する関心がなければ成り立っていかない。13期までのやはり積み重ねがあってこそ、よりこの経験が子どもたちに生きたと思う。そう考えると、やはり、保育者は、「適機」を逃さず働きかけることの必要性、また、その中で何を子どもたちに経験させたいのかという確かな指導性をもっていることの大切さを感じた。

また、もう一点として、色々な友だちにかかわる経験を大切にしていくことによって、色々な友だちの思いや考え、イメージにふれ、触発されることによって自分の中に新たなイメージや発想が芽生えたりするなど、いつも一緒に遊ぶ友達の中では気付かなかった自分を発見していくことにもつながっていくと考える。保育者の側から言えば、新たな関係性が生まれることによって、今まで気付かなかった、その子の一面が現れていくということである。保育者は、時期時期の子どもたちの友だちとかかわる力の育ちをとらえ、より色々な友だちと触れ合えるような環境の構成を考えて必要があると感じた。また、かかわりが広がっていくということだけでなく、その「質」を考えていかなければならないとも感じている。ただ、かかわっているということだけでなく、自分の考えをつたえたり、友だちの考えを受けとめたりする呼応できる関係をかかわる経験をとおして育んでいくことによって、気持ちのつながりを持つ集団になっていくと思う。しかし、人とかかわるということは、子どもたちにとっては自分と違う考えをもつ存在に出会うことであり、時に葛藤を伴うこともある。が葛藤や

トラブルを通して相手の気持ちを受けとめていくことや、良さに気付くことにもつながっていくと思う。この経験が呼応できる仲間になるためにはとても大切であると思うので、お互いの気持ちを伝えたり、感じ合わせたりするなど、保育者も日々心がけて援助していく必要があると感じた。

今後の課題

11期から14期の生活を経て15期に入った。幼稚園生活の修了期に当たる現在、子どもたちはいよいよ一年生になるという期待感を持ちつつ仲間とともに遊びを展開している。こま回しができるようになった子どもたちが、練習をしている友だちに回し方を熱心に教える姿、「おっつ、〇〇くんまわったあ。」と友だちのできるようになったことをともに喜ぶ姿などが見られ、一人ひとりの気持ちの中に、ほし組の仲間に対する温かい気持ちが育まれていることを感じている。

本各論では、一人ひとりの持ち味が学級の中で発揮されるためにはどのような環境の構成が必要なのかを探ってきたが、その持ち味が生かしあえる学級集団になっていたかについて考えるとまだまだ課題が多いし、保育者として援助のあり方を考えていく必要があると感じている。また、仲間関係の育ちが、子どもたちの豊かな発想力やイメージを引きだし、追求力にもおおきく作用していることもとられることができたが、検証不足である。今後の実践をとうして、考えていきたい。